

日記は記録性と日常性、そして歴史性を持つ

Contemporary Japanese prints Noda Tetsuya's 'Diary' series

4月5日→10月5日
大英博物館 三菱商事・日本ギャラリー（ロンドン）
+44 (0)20 7323 8299 入場無料



「照明を落とした展示室、ガラスケースの中に入った作品。まるで国宝を展示しているかのようで大変驚きました」

現在、イギリス・ロンドンにある大英博物館 三菱商事・日本ギャラリーで行われている自身の個展を見た感想を、野田哲也（1940ー）は笑いながら話した。大英博物館は131点もの野田作品をコレクションしており、会場には所蔵品を中心とした22点が展示されている。日本人版画家による同館での個展は、浜田知明に続き2人目のことだ。

野田哲也の《日記》シリーズは、1968年から制作が続けられているライフワークである。家族や知人、旅先の風景などを自身で撮影し、その写真をもとに木版とシルクスクリーンを組み合わせた版画作品で、同年の東京国際版画ビエンナーレで大賞を受賞するなど、初期から高い評価を受けている。

「油絵を勉強していた頃から、西洋を規範に仕事をしているような感覚に疑問を抱いていました。その時、小さい頃の絵日記の宿題を思い出したのです。日記ですから続けることに意味がある訳です」

50年近く続ける一貫した仕事。野田は今回の展覧会を通して改めて実感したことがあるという。

「作品に登場する私と妻の両親は亡くなっています。また、レセプションには40年以上前に肖像を作品にしたポップアートの旗手であるアレン・ジョーンズが来てくれました。日記には記録性と日常性、そして歴史性もあるのだと感じました」



大英博物館 三菱商事・日本ギャラリーでの展示風景

子どもの成長や何気ない風景、プレゼントを記す野田の日記は、人の日々の歩みを映し出すと同時に、過ぎ去った時を想起させる。今年は9月にシカゴ、11月には東京・ギャラリーゴトウで個展を開催予定。《日記》シリーズは展示する場所を選ばず、普遍的な意味を持つのである。